

イエス御自身が真ん中に立ち

ルカ 24 : 36 - 48



司祭 ヨハネ 井田 泉

2018年4月15日

復活節第3主日

奈良基督教会にて

今日の福音書はこのように始まりました。

「イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」ルカ 24:36

聖書日課をお持ちの方は、今日の福音書本文の始まりの所を見ていただきますと、「24:36b」と書いてあるのに気づかれると思います。これは 36 節の冒頭（36a）が省略されているということを示しています。何が省略されているかと言うと

「こういうことを話していると、」
という言葉です。

別に省いてもよい気がするかもしれませんが、しかしこの言葉によって、主イエスの弟子たちがどういう状態にあったかははっきりとわかるのです。

「こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」

時は日曜日の真夜中です。もう 12 時を回って午前 1 時あるいは 2 時過ぎかもしれません。月曜日の未明といったほうがいいでしょうか。その日曜日は大変な 1 日だったのです。

その日曜日の明け方早く、女の人たちがイエスの墓に行ったところ、ご遺体なかった、天使が現れて「イエスは復活した」と告げた、と知らせてきました。イエスを失った悲しみと、イ

エスが復活したという知らせによる驚きや困惑。さらに、イエスはペテロにも現れた。そんなことで集まった弟子たちは夜中まで興奮して話したり祈ったりしていました。そこに、その日曜日に、エルサレムから数時間もかかる山の下町、エマオまで行っていた二人の弟子が戻ってきてこういうことを話しました。——自分たちは道で復活されたイエスに出会った、何時間も話をした、夕食を共にしたとき、祈ってパンを裂いてくださったときにそれがイエスだとわかった、というのです。

復活のイエスに出会ったと確信と喜びをもって語る人。驚き、困惑、期待……が渦巻いて議論が果てしなく続き、だれも寝ようとはしません。

そのとき、弟子たちがこういうことを話しているとき、そのときにイエス御自身が彼らの真ん中に立たれたのです。36節は初めから読むとこう書かれています。

「こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」

このように読むと、情景がいろいろと浮かんで来るのではないのでしょうか。

「イエス御自身が」と書かれています。話の中心はイエス御自身に移るのです。弟子たちがどうであるかはもちろんどうで

もよいことではなく、大事なことです。しかしそれ以上にここで大事なのは「イエス御自身が彼らの真ん中に立たれた」ということです。

願わくは、復活のイエスさまがわたしたちの真ん中に立ってほしい。わたしたちが悩んだり困惑したり議論したり対立したりしているとき、イエスさまご自身がわたしたちの真ん中に立ってほしい。そうすれば、わたしたちの関心は自分や人のことではなく、イエスさまに関心が移る。救いが起こる。イエスが中心になってくださったとき、新しい何かが始まります。それをほかでもなく一緒にここで経験したいので、わたしたちはこの礼拝の初めに、こう歌い祈りました。

♪「主イエス・キリストよ、おいでください」

♪「弟子たちの中に立ち、復活のみ姿を現されたように、わたしたちのうちにもお臨みください」

36 節の続きを読みましょう。弟子たちの真ん中に立たれたイエスは

「『あなたがたに平和があるように』と言われた。」

弟子たちに、わたしたちに平和がないのをイエスにご存じます。わたしたちにない平和を、イエスが与えようとして呼びかけてくださる。

ところがこれに対する弟子たちの反応はどうでしょうか。

「37 彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。38
そこで、イエスは言われた。『なぜ、うろたえているのか。ど
うして心に疑いを起こすのか。39 わたしの手や足を見なさい。
まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨も
ないが、あなたがたに見えるとおり、わたしにはそれがある。』
40 こう言って、イエスは手と足をお見せになった。」

イエスは一生懸命になっておられます。どうしたら皆が自分
を信じてくれるのか。わかってくれるのか。両手を見せて、両
足を見せて、「見なさい」と言われ、「まさしくわたしだ」と言
われるイエス。

「40 こう言って、イエスは手と足をお見せになった。」

わたしたちが弟子たちともに、差し出されたイエスの両手両
足をはっきりと見るなら、深い釘跡のあるイエス、肉と骨のあ
るイエスさま御自身をはっきりと見ます。

復活がわからないということがある。わたし自身がかつては
そうでした。それでイエスの復活について考える。議論する。
しかし、今イエスは、「わたしの手、わたしの足を見なさい」と
言われるのです。それを見ず、それを聞かないで何の議論でし

ようか。イエスがご自分が生きていることを弟子たちにわからせようとされるのは、ご自分のためではありません。弟子たちのため、わたしたちのためです。わたしたちに救いを得させ、命を得させるために、イエスは一生懸命なのです。

続きを読みましょう。

「41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、『ここに何か食べ物があるか』と言われた。42 そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、43 イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。」

ここまで来ると、イエスさまには申し訳ないのですが、笑えてしまうかもしれません。弟子たちは依然として、喜び、驚き、困惑し、不思議がっている。けれどもイエスさまは、弟子たちを困惑や不思議の中に置いておくわけにはいかない。ちゃんとわかって確信してくれなければ、復活した意味がない。どうしたらわかってくれるのか。それで見てもわからず、聞いてもわからうとしない弟子たちの前で、焼き魚を食べて見せるのです。

復活のイエスさまのあまりの熱心さと振る舞いを見て、わたしたちはむつかしく考えることから解放されて、もうイエスさまに同情したくなる。そこまで、イエスさま、あなたはわたし

たちにご自分を示そう、わからせようとされているのですね、と。

どうか、このイエスの熱心が、わたしたちのかなくなさのために、わたしたちの愚かさのために、無駄になってしまうことがありませんように。

祈ります。

主イエスさま、あなたが復活されたこと、現にわたしたちのところにおいでになっていることを、わたしたちにわからせてください。わたしたちの議論や考えや当惑からわたしたちを解放し、わたしたちの関心をあなた御自身に向けさせてください。復活されたイエスさま、あなたが生きておられることを、わたしたちの心の目を開いて教えてください。わたしたちを見捨てられないあなたの熱心を感謝し、み名をほめたたえます。アーメン